薬用作物産地支援協議会
令和二年度　薬用作物の産地化に向けた地域説明会および相談会

産地化取組事例紹介

トウキの産地化について

利根沼田農業協同組合
薬草部会

本日の内容

- JA利根沼田の概要
- 部会発足の概要
- 当帰について
- なぜ産地化できたか
- 産地の現状と課題、展望

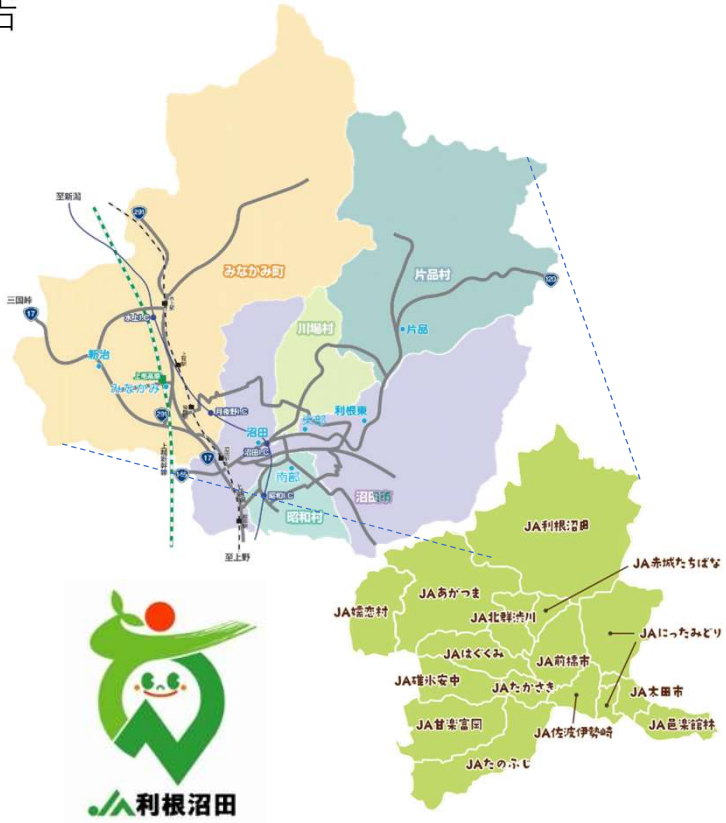
JA利根沼田について

群馬県の東北部。県面積の約1/4を管轄

沼田市、川場村、みなかみ町、昭和村、
片品村の全域が管内。

赤城山麗の肥沃で広大な耕地を活用した

コンニャク、レタス、ホウレンソウ、山ウド、
トマト、エダマメなどの栽培が盛んである。



ブランドトマト「夏美人」

http://aic.pref.gunma.jp/farmproducts/release/2014_07tomato.html

ブランド枝豆「豆王」

経緯

1992年：10農協、1酪連が合併、
「利根沼田農業協同組合」を発足

2010年：JA片品を合併、現在に至る

薬草部会の概要

部会員数：25名
栽培品目：当帰　計10ha
出荷数量：約35t　（2020年現在）

1970年代：コンニャクの価格低迷。
代替作物の一つとして薬草を試験栽培
（隣接する現JAあがつまにて既に薬草栽培が実施されていた）
1980年代：実需者とミシマサイコの契約栽培を各市町村JAごとに締結
➡後にトウキ、センキュウ、ブシの栽培を開始
1990年代：実需者の意向で、トウキの生産が主品目に
1992年　：利根沼田農業協同組合　設立
2015年　：JA利根沼田 薬草部会　発足（現在はトウキのみ栽培）

➡ 産地として定着してから<u>約40年が経過</u>

当帰について

セリ科の多年草。
トウキ*Angelica acutiloba* Kitagawaの根

➡実需者から種子が供給される。
２年栽培（育苗１年、定植１年）

～種から出荷までの流れ～

育苗期間：9ヶ月
6月播種→翌4月、苗収穫

定植：8ヶ月
4月定植→11月収穫

加工調製：3ヶ月
11月収穫→3月出荷

計20か月

育苗開始 6月 → 育苗圃場管理 6～翌3月 → 苗収穫➡定植 3月 → 定植圃場管理 4～11月 → 収穫～洗浄 11~12月 → 乾燥～調製 12～3月

なぜ産地化できたか？

①生産性の高い土壌

➡水はけがよく畑作に向く土壌。

②コンニャクとの輪作

➡除草剤の少ないトウキに有利

③他作物の設備が転用可能

掘取機：コンニャク、ウド、アスパラ
ハウス：雨よけトマト、コンニャク
乾燥棚：養蚕、コンニャク

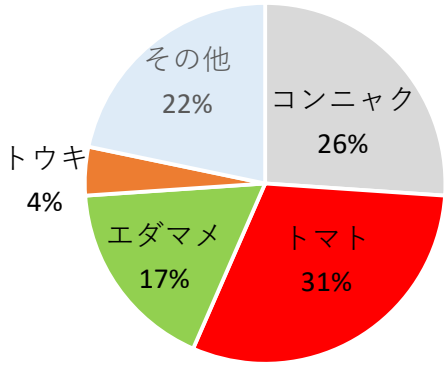
④気候的要因

冷涼な気候　➡トウキの栽培適地
冬期の労働　➡野菜の栽培ができない時期の仕事
女性、高齢者でも可能な軽作業（加工調製、選別）
上州のからっ風➡乾いた風で自然乾燥が可能（機械乾燥不要）、雪が少ない

産地の現状

部会員へのアンケート（2019年実施）

経営の主力品目は？



➡ コンニャク、夏野菜

トウキが主力の生産者はいない。

薬草栽培の長所は？

１位　契約栽培、安定収入
２位　自然災害、獣害に強い
３位　冬場の仕事になる
４位　作業に時間的余裕がある
５位　必要経費が少ない

所得の安定化、　冬期の収入源
年間労働力の平準化、雇用者の周年雇用
などから<u>主力品目を補う作物</u>としての需要がある。

産地の課題

部会員へのアンケート（2019年実施）

薬草栽培の短所は？

1位　調製作業が大変

2位　収穫後の水洗が大変

3位　育苗が安定しない

4位　農薬が少ない

5位　栽培方法が特殊

➡ 機械化/省力化が遅れており、熟練の手作業に依存

➡ 育苗がメイン作物の繁忙期に重なり、育苗を失敗する

➡ 栽培体系が未熟で生産者のノウハウに頼る部分が多い

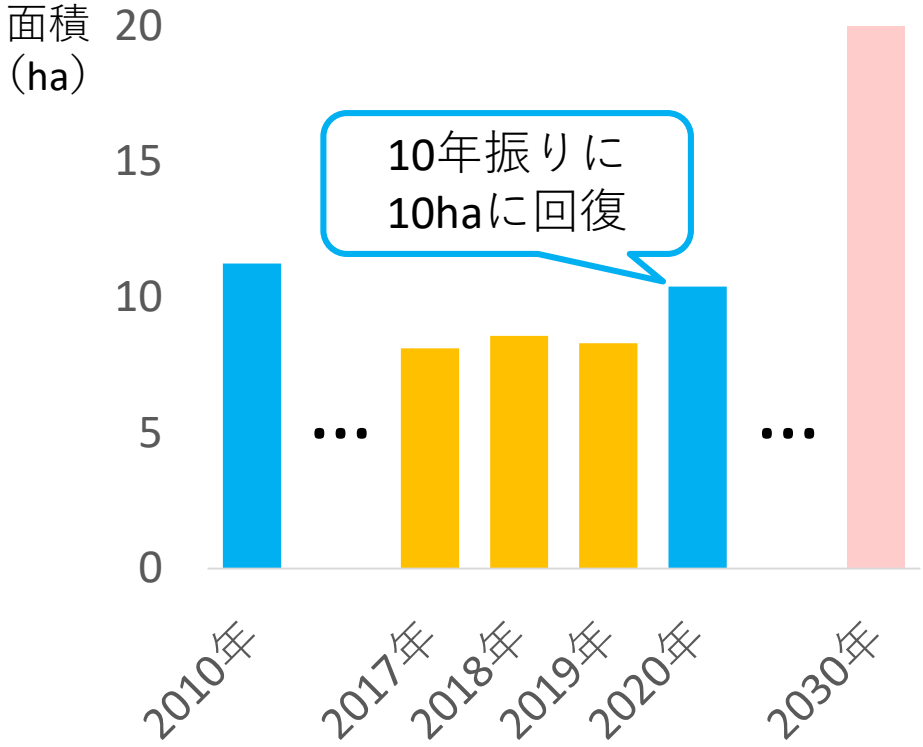
特殊かつ手間がかかるため、新規生産者の獲得に難渋

各課題に対し、

①JA、②実需者、③群馬県の3者で改善模索

今後の産地としての展望

将来20haに向けて栽培拡大中



- **機械化による改善**
  定植･収穫･選別に重点
- **苗生産の安定化**
  栽培技術の研究と普及
- **新規生産者**
  栽培の体系化とマニュアル化
  経営モデルの提案･普及

ＪＡ、生産者、実需者が共通の問題意識を持って課題に当たることが肝要